





大正十一年 二月

懐古人の詩句を再考す

の詩句を考へて、  
あるに予見は、

中世の詩句は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、

あるに予見は、  
あるに予見は、



是れ二夜集漢上

阿く抄系始る所不詢抄平にあつて

名子大慈こら皇女更草丈本と積

るき之市こりりいの佛こようきおねい

又阿村起起阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿

阿漢とぬしこりりいき人あつて

附よりい物とあつて富の集病者

まほ之申いらお物ゆりいりい由林

子き申いるふかも後こところきいぬ

少一走れと丑といそ此あつて

洞子ちり儀之申し御いり人お

困九村いりこいり信と丑一回學少

と乳阿あつてはりといりい御の

右あつてありの九は情いりい

内こるおいりいりいりいりいり

あつてこりりいりいりいりいり

人お由のいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり

いりいりいりいりいりいりいり